

スタール夫人『ルソーについての書簡』の二つの序文

加太, 宏邦

(出版者 / Publisher)

法政大学教養部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政大学教養部紀要

(巻 / Volume)

49

(開始ページ / Start Page)

121

(終了ページ / End Page)

133

(発行年 / Year)

1984-01

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00003187>

スタール夫人『ルソーについての書簡』の二つの序文

加 太 宏 邦

スタール夫人の『ジャン＝ジャック・ルソーの作品と人についての書簡』(以下『ルソー書簡』と略す)には二つの序文がついている。ひとつは1788年の初版につけられたもので、もうひとつは1814年のものである。『ルソー書簡』自体が彼女のはじめての出版物¹であること以上に、私たちが興味をおぼえるのは、この二つの序文の存在である。それは1788年のが、いわば夫人の生涯の出発側の枠をつくり、1814年の方が夫人の実質上の(作品に関する)絶筆のひとつとなったため、終着点側の枠をつくっているからである²。偶然の二つの枠を彼女の文学活動全体の(従って生活全体の)シンボルとして見る事が出来ないだろうか、と言うのが本稿における考察の眼目である。³

スタール夫人の生存中に出版された作品中、*préface* と同義の *avant-propos* や *avertissement* を含めて「序文」と称するものが見られるのは、『情念論』、『文学論』、『デルフィーヌ』、『ドイツ論』そして本論の『ルソー書簡』ぐらいである。しかしこの内で二つの序文を持っているのは『ルソー書簡』をのぞいては『デルフィーヌ』だけである。但し、『デルフィーヌ』は、初版以降に結論部分の大幅な改変を夫人が思いたち、そのことわり書きとしての序文が新版にそえるため用意されていたもので、遺稿中に発見されたものでもあるから、はたして夫人の意図が奈辺にあったかははっきりしない。とにかく、『デルフィーヌ』における二つの序文はとくに時間的間隔から言っても思想的距離から言っても考察の対象にする意義はうすい。又、結末部分の変更内容は、ひとことで言えば『情念論』から『自殺論』への移行に合わせて行なわれたもので、もし興味ある問題があるとすればむしろこの二作の比較にあるのであって、これは私たちがこれから考えようとしていることとは一応別の問題である。それで、結局、『ルソー書簡』は私たちの考察に幸運な序文を持っている唯一の作品と言える。

1788年、すなわち『ルソー書簡』が出版された年には⁴、アンヌ＝ルイズ＝ジェルメーヌは駐仏スウェーデン大使館参事スタール＝ホルスタイン男爵の妾として生活をはじめて二年目にあり、大革命の前年であり、父親のネッケルがルイ16世に請われて大蔵大臣職に復職した年であり、ルソーの死後10年目にあたる年である等々の状況が彼女をとりまいていた。一方、1814年の方は、むしろ、ここまででということがフランスに起っていたかを歴史書にでもあたる方が意味があろう。彼女自身について言えば、革命の他に、とくにナポレオンとの確執のため亡命を余儀なくされていた波乱の10年がこの間に含まれていた。彼女はこの3年後に亡くなる。

しかし、二つの序文を考える時に、この二つの年号に、歴史的な又、彼女の履歴上の意味を私たちは求めることはしない。スタール夫人はよく時代の流れとの関係で眺められる人物であるが、実際は、彼女のような個性は、はっきり内側の動機で生きていたようにむしろ私たちは見るのである。そのこともあわせて本稿で考えてみたい。

1788年につけられた序文（以下〈第一序文〉とする）は次のような文章ではまっている。

ルソーへの讃辞文はまだ存在していない。そこで私は自分の賞讃が表明されるのを見てみたい必要性を感じた⁵。

22歳のスタール夫人の第一声である。私たちにとっては、彼女とののはじめての出会いである。「……はまだ存在していない。Il n'existe point encore de……」という表現を尊重しよう。これが太初だからである。彼女自身もこの『ルソー書簡』で「有名な作家の何人かはその処女作に、後のすべての作品の萌芽を宿しているものである」⁶と言っている。処女作のさらに前に置かれた序文のその第一句の声の調子はよく聴いてみる価値が充分ある。

彼女は太初にふさわしく、まず天地の闇を宣した。次に「光あれ」と自ら再びとなえる。彼女の生涯をつらぬく象徴的な生存の形式、彼女に独特な型がここに確かにあらわれている。ではその闇のひろがる天地というのはどういうものなのか。第二句に使われている「表明 exprimer」(ここでは目的補語の属詞としての過去分詞法になっている)が ex- という接頭辞を持つ語であることを見れば彼女との位置関係はわかる。しかし彼女はたんに「外」に存在させる、とだけ言っているのだろうか。それならば暗闇の宣言はいらない。第一句と二句との絶対的なつながりを無視しないでおう。すなわち、彼女にとって

は、「外」は本来的に無の状態であって、その闇に光を充満させるという情熱、空間を充足させようという情熱が重要な意義を持つのである。しかもそういう自己存在の充足にとどまらない。内なるものを外在化し、それを「見てみたい」という願望が加わるのである。すなわち、自己の光によって充満した宇宙をたんに外なるものとして放置するのではなく、再び、自己の内にとり込まねばすまないという意識を持つのである。外へ創造した être に完全合一することによって自らが exister (ex-sistere) するという生存のディアレクティク、これがまさに彼女の生涯を規定するものである。

次のことばに進もう。

他の方が、私の感じていることを描いて下さっていれば、おそらくそれでもよかっただろう。しかし自分の enthousiasme⁷ の思い出と印象を自分自身の中にたどてみる、といういささかの楽しみも感じたのである⁸。

前半の句は本心でない。いや本心でもよい。いづれにしても無意味である。彼女の判断では、そういう「他の方」は宇宙のどこにも存在していないのだから。彼女は別のところでも言っている。「願望というのは決して他人の経験で鎮静するものではない」⁹と。なにより「しかし」がこの前半を消し去ってしまう。後半の句はいわば自己完結的な充足であって、第一声のあり方と逆である。だが、よく注意してみると、この自己の中に enthousiasme を受けた自分と、その自分をふりかえる自分が存在していることがわかる。自己を別の自己が再び生きることと得られる「楽しみ」を彼女は持つのである。この形は自発的な対象依存による「喜び」の開始という意味で実は第一声と同じなのである。

ルソーはどこへ行ったのか。もちろん、彼女にとっては自己の生存を仮託する重要なモメントである。しかしそれなら他の人間でもよかったはずである。所が、それは「時」の問題をぬぎにしたはなしで、つまりは、あり得ない仮定ということになる。少女時代から新婚時代のスタール夫人には、ルソーは必然的な対象であったことは事実だから¹⁰。ただしこれを一時的熱情と考えることは出来ない。結果的には一過性に見えるであろう。しかし彼女の「現在」とっては永遠の熱情である。その熱情はルソーがあって自分がいる、という未分化の状態でなく、ルソーの消滅さえ可能なところへ追い込む熱情である。彼女は『ルソー書簡』で再び言う。「この[ルソーの]作品が私につくり出した効果を私の中にたどることに身をまかす」¹¹。又、D. G. Larg が言うように、ルソーの思想は、スタール夫人にとっては理論体系としてでなく感情として価値があ

ったのである¹²。感情のコレスポンダンスあるいは宇宙の一体化と言ってよい。〈第一序文〉には「ルソー」という名前は先に引用した冒頭の一箇處と最後の一節にもう一箇處見られるだけである。それを「枠」という図式をここでも使用して考えてみれば、〈第一序文〉は「ルソー」という名前で前後に枠をかけられた、スタール夫人自身の外なる対象物への合一にはじまる自己生存のマニフェストだととらえなおすことも出来る。

さて生存とは、とりあえず現在の別称でしかないとすれば、

おそらく、寛大な気持の方々が私の中にいささかの才能のきざしを読み取って下さるとしても、将来のいつの日にか待つべきだった力を超えているような題材をあわてて扱ったと非難されるであろう。しかし時というのは人の力を増加してくれるのか減少してしまうのかはわからない。才知の進歩など予知出来るか。いかにして、不確かな未来のひと時に、期待をよせ、又、今感じている気持の印象を持ち込むことに同意出来るか。¹³

というスタール夫人のことは、一見くどくどしているが、その真意は、正に、生存は現在以外には等号で結ばれ得ないということを断言したものとなる¹⁴。もちろん、これは観念的主張とは何の関係もなく、感覚的、生来的発言である。

彼女には未来という観念がないわけではないが、¹⁵「ポジティブな意味では未来を存在させることは出来ない。だからと言って、現在に生きる、というような人生訓的発言で、未来を彼女は否定している訳でもない。「不確かな未来」という表現は意味深い。未来が確かでないのはだれにも当然のことである。しかし、確かな未来がないとしても、ライブニッツ流に言うなら、未来は現在にはらまれているのであって、この点で、彼女は未来を断固、現在からも、現在の自己からも、何かを恐れているかのように、切り離す。これも彼女の第一声と密接につながる独特の生存形式である。さらに、

時は、おそらく、幻想をさましてくれるだろうが、又、ときとしては、真理そのものにも打撃を与えてしまい、時の破壊的な手は必ずしも誤謬に対してだけにとどまらないのである¹⁵。

とひたすら、一般的未来を批判の対象に持ち出すことで、現在を思念の内で、固定化している。だが、静止する現在はないから、将来にも「真理」と「誤謬」があるだろうに、そんなことには関心をしめさない。『ルソー書簡』の書き出して、彼女は「ルソーがはじめての作品を書いたのは40歳の時である」と言っているが、これは今のことを考える上で、興味のあることである。ルソーはスタール夫人（そして彼女のことは借りれば「大方の人々」）と全くちが

う開花のしかたをしたのである。「彼が仕事に専念出来るためには、彼の心と精神が静められる必要があったのだ」とすると、彼女は、「時」と口に出して言う時、ルソーの青年時代は自分のそれとは完全に切りはなして考えてことになる。すなわち、自己の現在は、一般的現在の中で、特権的な位置を持つことをはからずも言明したことになる。今のこのルソー論が彼女にとって自分の絶対的な生存の表出だったからとしか考えようがない。

この〈第一序文〉の結句がさらにその裏うちとなっている。

それに若い時にこそ、私たちはルソーに対して最大の感謝をかんじるべきでないだろうか¹⁶。

この一文は、どこにも一般的提案をふくんでいるものではない。「私の、今の、この一瞬にこそ私はルソーに対して……」と読みかえるべきものだ。

〈第一序文〉の中の一般論的よそおいの下にはことごとく彼女がかくれているのである。（その姿は三度使用された「しかし mais」のあとで浮び上がっていたと言えよう）。この22歳の彼女はこれから、知らず知らずの内に規定した生き方の形式をとっていくであろう。で、もうひとつの「枠」は、その生活をどうふりかえるのか。

1814年の序文（以下〈第二序文〉とする）は、普通の意味で序文とは言えないようなものに見える。タイトルをのぞいては、実質上、ルソーの名前も、ルソーの作品も、思想も、およそ、ルソーに関する言及が一箇處もないのである（その点では、〈第一序文〉も似たりよったりであった。そして、そのこと自体にこそ意味があった）。

〈第二序文〉の書き出しは次のとおりである。

この『ジャン＝ジャック・ルソーの作品と人についての書簡』は私が世に出たばかりの頃に書かれたものである。それは私の同意なしに出版され、この偶然のために私は文学への道へとひき込まれた。それを悔んでいるということはない。それは文学の教養から心痛よりは喜びの方を多く得たからである¹⁷。

このあたりは「序文」の体裁をととのえている。そしてこれは『ルソー書簡』以降の26年間に對してある回想的な意義づけを与えている。だが、真意は表面にあらわれているものほど単純でない。〈第一序文〉についてふれたあの「時」は十分に流れ、無限回の「現在」があったはずであるが、彼女が気にしたはずの「真理」も「誤謬」もどこかへ消えてしまって『ルソー論』はご用済みの経験に帰しているかのように平然としている。一方「文学の道」という一般化された表現に言いかえられた人生体験が回想される。しかし、この「文学の道」

は、当然ながら、抽象的なものであるはずがなく、個々の具体的な経験を担わされた特殊なものである。こういうひとつひとつの営みの26年間について、今、一番気になるのは、それが幸福とつながったか不幸とつながったかということである。もちろん、これは文学研究の一般的効用を語ろうとして言い出したことではない。なぜなら、文学活動は原理的には「心痛」や「喜び」の原因ともなるが結果でもあり、つまり、もっと複雑な関係（無関係も含めて）でしか人の幸、不幸にむすびつかないことは彼女も充分承知しているからである。とすると、彼女のこの意識には、当然、文学の教養によって救われなくてはならぬものが存在したということに力点がかかっていると理解しなくてはならない。（「文学の研究はそういう[情念の影響を受けやすい]性格の危険性を減らしてくれる」¹⁸とも語っている）。救われるものは何か。それは情念の地獄にいる自己である。しかし救われることによって生身の自分をいささか売り渡さねばならない。そういう26年間で＜第一序文＞以降の彼女にはおそろしいほどの勢いで流れて行った。その予感はず充分あった。存在を創造するための幻想とも言ってもよい対象が彼女の意志にもかかわらず喪失¹⁹することは充分あり得る。そうした限界での生き方しか出来ない彼女におとずれる絶望の大きさは何で救われたのか。こう考えてくると、スタロビンスキーが彼女の「自殺」について精緻な分析を行なった中で述べた *survie*²⁰ を、この「喜び」が辛うじて支えていると言って良いように思われる。

さて、そのあと、夫人はこう続ける。

才知の発展と完成の内にはたえない活動があり、たえず生れかわる希望があり、これは普通の生活の流れの中では与えられないものである²¹。

興味をひく表現である。「たえない活動」と「たえず生れかわる希望」。この二つは実人生ではあり得なかったものと言う。必ず消え去っていくひとつひとつの実存を救ってくれるものは才知（文学の教養）しかないのである。たしかに、彼女にとっては実人生では実存は必然的に絶望につながり、絶望は集積して、決して希望は再生しなかったのだ。不断に彼女をおそった絶望は生命の終焉にほとんど結びついた。しかし決定的には結びつかなかった。それが、これもスタロビンスキーの表現によるが、「経験的、個人的存在の廃止」²²でもってかろうじて「精神的自殺」へ傾斜していく彼女の安全装置なのだ。すなわち文学の行為との重り合いである。この「第二の生存」でもって彼女は再び別の形で生きた。ただし、だからといって、ここが安全地帯だった、ということではなかった。実人生はあいかわらず継続し、この中での苦悩の度合は、ある意味

では増加さえしていったし、第一、彼女は、あの第一声で自らを規定した生き方を変更することは出来なかったのである。彼女にとっては、過去の修復は絶対になかっただけでなく、未来と現在との間にひろがる空隙に「おそれ」を持ったのだから²³、極めて不安定でむつかしい姿をした現在を人工的にでもつくり出して生きねばならなかった。＜第一序文＞の子供である『ルソー書簡』にはルソーの『新エロイズ』の中の自殺論についての言及がある²⁴だけでなくルソー自身の自殺説に加担する長い脚注と言及がある²⁵。そして周知のとうり、後に彼女は自殺を肯定する『情念論』、否定する『自殺論』等を書いた。これは、26年の歳月が、彼女を自殺肯定論者から否定論者へとかえていったというような意味で見るときでなく、問題は、彼女が、手にしては逃れていく、存在の顕現化に資した対象とは別に、すなわち第二の生に希望の再生へと（最小のささやかなものではあるが）みちびくような道を得たらしい、ということである。彼女は次のように続ける。

女性の宿命の中では、一切が下り坂の方向に進んでいく。例外は思考だけで、思考の不滅の特性といえども常に上昇するということである。²⁶

突然に、ここに「女性」が出て来た理由についてはあとで考える。さて、この中で「思考」は先の「文学の教養」と同義と見てよい。下降するものと上昇するもの。この二つはスタール夫人の中にある対立項の統合というディアレクティクに関係している。そう読みとるのは、たんに「思考」を下降の救済の用具として彼女が見ているのではなく、下降ということがあればこそ「思考」が必要となるという、関係の両立に解釈するからである。これは＜第二序文＞における構造といってもよいもので、彼女が根本的に、人間にまつわる一切の不幸はすなわち人間の生の根源に根ざし、あやうく生命との同義であると感じることが私たちには読めるからである。ついでながら『情念論』はその存在理由が、このディアレクティク以外には求められないと言ってよい。

さて、上に見るとうり「女性」ということばが突然あらわれた。実は以下＜第二序文＞は一見、女性論に転じていき²⁷、それはほとんど最後の句まで続くのである。その意味を、彼女が自己の生存を創造するために持たねばならなかった「愛」の対象ということを中心と考えてみる。

現在知られている彼女のはじめての書簡は1778年のはじめ頃、すなわち12歳のものと推定されているが、ここから、まず、母親が愛の対象であることを知ることが出来る。女の子が母親を愛するのは普通のことであるが、彼女の場合、その対象の喪失感のはげしさでもってかえってその存在の大きさが特色づ

けられるのである。母親と離れて生活をしなくてはならなくなったその時、こう書いている「お母さん、私はお母さんに手紙を書く必要があるのです。私の心は締めつけられています。私は悲しい。そしてこの広大な家の中で[...]私は砂漠しか見えません。はじめて気がついたのですが、この空間は私にとってはあまりにも大きすぎるのです。それで私をとりかこんでいる空間が少なくとも視野に納められるように私の小さな寝室へ駆込んだのです。この一時的にせよ、お母さんの留守は自分の運命に対して身ぶるいをさせました。お母さんにはどれだけでも気晴らしがあるでしょうが私にはお母さんしかいないのです[……]」²⁸。作品についての第一声である〈第一序文〉と、この生活上の（私たちの知る限りでの）第一声とは完全と言って良いほどの一致を見ている。私たちが見て来たスタール夫人に関するあらゆるシンボルをここにも見い出す。「必要がある」という表現、広大な空間とそれを満したいという狂おしいまでの願望、すなわち「留守 absence（不在）」に対する本能的恐怖、現在において絶対的なもの（母）には代替物がない、ということ等々である。

彼女は全身でもって対象に自己を投入してしまわないと自己の生が充足されない²⁹ことは何度も述べたが、このあとの彼女は、父親に、「大革命」に、そしてコンスタンをはじめとして幾多の男性に自己を投げ入れ、はげしい燃焼を行なっていた（全くその逆に、ナポレオンへの嫌悪も彼女を燃え立たせていた）。これは、たんなる男性遍歴の、あるいは恋物語りというような暢気な話しではなかった。〈第二序文〉の先の引用をもう一度見る。「女の宿命の中では下り坂の方向に進んでいく」と語っている。なぜ「女」なのかという問いに対する答えはすでに出た。「女」は「女としての私」なのである。彼女が暗闇につくり出す光は決して抽象的な理念でなく *enthousiasme* を与える男性である。すなわち「魂の高揚によってのみめぐりあえる真理」³⁰である男性であった。彼女の有名なことば「愛は女の一生の歴史。しかし、男の一生では単なるエピソード」³¹がこれを語っている。こう断言する以上、抽象的な男女の区別のない人間について彼女は語ることが出来なくなる。すなわち、彼女は女としての自分の情念の特殊性を明示し、その物語りを語る他ないのである。そのために〈第二序文〉の大半は、いかにも女性論の調子を帯びているように見えてしまうのである。

文学の好尚や研究が男性に大いに有利だということはまず否定されたことはない。しかし、そういう文学研究が女性の宿命に与え得る影響については一致した考えはない。家事への隷属を女性に押しつけることが主眼となるのなら、女性の知性を増やす

のはおそれるべきであろう。女性の宿命に対して反逆する気になられたら困るからである³²。

以下、〈第二序文〉は続いていくが、なるほど、論旨をくめば、たしかに現代人好みの「女性論」である。しかし上に述べて来たように、スタール夫人には、女性である前に人間だというような雑な視点を持つほどの「高等な」頭はなかった。このことを理解しない限り、なぜこれが「序文」なのか不可解なまままで終ろう。

〈第一序文〉で見たとうり、彼女は、一般的な時間には関心がない。それと同様に、彼女には一般的な人間は興味の対象外なのである。もし論述が一般性を帯びる必要があるとしても、それは自分すなわち女の意識でしか考えない。例えば『ルソー書簡』においても彼女は幾度も一見女性論風な議論をはじめて私たちをとまどわせる。又、彼女の女性宇宙の度合いは、例えば、彼女の創作の題名『ソフィ』、『ジャヌ・グレイ』、『ミルザ』、『ポリヌ物語』、『デルフィース』、『コリンヌ』、『荒地のアガール』、『ブラバントのジュスヴィエーヴ』、『ラ・シュナマート』、『ラ・シニョーラ・ファンタスティチ』、『サフォ』をみればよくわかる。いづれも女性名が表題となり、かつ主人公となっている（例外は三つあるが、ひとつは女性名と男性名が並んでいる『アデライドとテオドール』、もうひとつは人名でない『人形』というもの。これは確かに女性名ではないが、女主人公の姿をした人形のこと、従って、はっきり例外と言えるのは、ただひとつ『ケルナデック船長』だけである。（この作品は彼女にとっては唯一の喜劇で、そのことと男性主人公であることは何か関係があるかも知れない）。いづれにしても、この女性論的外見に安直にとびつくわけにはいかない。観念としての人間の映像をむすぶことをしなかった彼女は、結果として、自分の姿、自分の情念、自分の歴史が、女性として直接にあらわれたにすぎないからである。女性の像が鮮明になればなるほど男性が又、鮮やかに、明確に浮び上がるのは当然だ。しかしそれは理解の対象という観念でなく（人間を観念としてとらえなかったように）自己を、女を成立させるような意味での男性であった。彼女は少女時代を終わると次に最も熱愛の対象としたのが父親であることは象徴的なことである。父は1804年4月に亡くなったが、亡命生活のさ中に、彼女はただちに『ネッケル氏の人間と私生活について』の執筆にかかり、10月には脱稿している。この情熱は普通のことだろうか。例えば、彼女の長男のオーギュストは、母の死後その全集づくりに参加はしたが、巻頭をかざった『スタール夫人の人と作品』は母のいとこのネッケル・ド・ソシュール

夫人にまかせてしまった³³。この372ページの力作を息子が書かなかったことは、しかし、ふつうの親子関係ではむしろ充分有り得ることであって、スタール夫人の父への讃仰の方が注目をひくのである。『ルソー書簡』についても多くの評者が持つ一致した印象は「熱烈な讃嘆」³⁴に尽きる。実証とか客観とか批評とかいう間接的な接近を絶対に行なわない。ルソーへ突入していく。それも讃辞をもって。これが、彼女の接した多くの男性にもむけられた³⁵。こうやって、彼女には、人間というものがいるのではなく（従って、スタール夫人の女性論を女権の主張などに今日の人が結びつけることは的はずれで）女としての自分がいて、男がもう一方で彼女の宇宙を充足させるものとして存在して来たのである。実はこれは〈第一序文〉ですでに顕在化していたのだが、〈第二序文〉では、生涯の総括をより明瞭な形で、一見女性論に見える唯一の「自分史」に託して描き切った。

〈第二序文〉の結びを見てみよう。

つまるところ、我が身の自分自身に対する関係だけを考えるなら、生命のより大きい強さはつねに幸福の増大なのである。苦悩は確かに、あるエネルギーを持って私たちの魂の中へ深く入り込んでくる。しかし、結局、それにまさる能力を与えて下さった神に感謝をしなくてすむ人はだれ一人としていない³⁶。

「我が身の自分自身に対する関係だけ」というのは、自己と他者との関係で生きて来たことの大変にがい反省だと言える。しかし、だからと言って、彼女は、反省をとり入れるわけではない。それは出来ない。しかし、自律的な生き方ということをもし行うならば内なる自己のみの強さが幸福へつながる、ということを知ったと彼女が言いそえているにすぎない。幸福というものは彼女にとっては、ある意味では情念の制御であり、要するに自律であるから、これは、〈第一序文〉のあの投企の独特な型を生きつづけるスタール夫人には、どうしても手に入らないものとなる。しかも「苦悩」はそういう完全な自律の中にすら強力に入り込んでくる。スタール夫人は人一倍その焔にさいなまされつづけてきた。しかし、彼女はそれでも、その焔なくしては生きられず、近よりすぎて身を焦し、一歩しりぞいては身ぶるいし、再び火に近づくという情念の地獄をくりかえして来た。しかも火は、彼女が、本来なかった暗闇に自らの手で燃したものだ³⁷。

この焔の鎖という生き方を断ち切ることは出来なかった。しかし水をかけるぐらいのことは出来た。それが「文学の教養」だった。ただ、その文学のはじ

まりとなったルソーはやはり自分のともした火の一種ではなかったのか。少なくとも共、ヴィネが言うように、「本質的にひとつの行為でないような一文も彼女は書かなかったはずだ」³⁸。そうすると、〈第一序文〉と〈第二序文〉をつなぐおぞましい鎖は、これはもう彼女の手におえる連鎖ではない。この独特な生存形式を丸がかえ神の御手に放り出して自分に納得を強いる他ない。〈第一序文〉と〈第二序文〉という二つの枠の中ではスタール夫人の不幸と幸福の一切がきれいに結晶してひとつの生命の全体を見とらせるシンボルとなっている。

注

- 1788年以前に執筆された作品は数篇あったが、いずれも出版されたのは1790年以降のことであった。
 - Anne-Louise-Germaine Staël-Holstein, 1766-1817 には前述のように1814年の『ドイツ論』（パリ版）を出版したあとは3年後に死ぬまで公刊された著作はない。ただし、『翻訳の精神について』は1816年に公けにされたが、ミラノの雑誌 *Biblioteca italiana* にイタリア語で発表されたものである。又、遺稿中には死後出版された重要な作品が二つある。さらに作品以外のものとしては、日記（少女時代）や書簡が多く残っている。従って、私たちが言う「枠」というのは、それほど厳密な意味で彼女の文学活動上の生涯を区切るものではない。
 - 多くの人々が論じている『ルソー書簡』そのものは、ここでは考察の直接の対象とはしない。
- Madame de Necker de Saussure : *Notice sur le caractère et les écrits de Madame de Staël*, 1820. pp. lv-lx.
- D. G. Larg : *Madame de Staël*, 1924. pp. 61-87.
- G. Solovieff : *Madame de Staël*, 1974. p. 21.
- A. Vinet : *Madame de Staël*, (1908) pp. 30-33.
- Sainte-Beuve : *Madame de Staël in Portraits de Femmes*, (Pléiade) 1951. pp. 1068-1069.
- V. Rossel : *Histoire littéraire de la Suisse romande*, 1903. p. 469.
- R. Wellek : *A History of Modern criticism*, vol 2, *The Romantic Age*, 1981. p. 223.
- 城野節子：スタール夫人研究、1976. p. 5.
- 永田英一：「スタール夫人〈ルソー〉についての書簡」『文学研究』（九州大学）1948. pp. 101-122. 1954. pp. 93-97.
- 杉 捷夫：スタール夫人「文学論」の研究1958. pp. 6-19.
- 1788年より前に私家版として20部ほど出回っていたと考えられるふしもある。Larg ; pp. 61-63.

5. *Lettres sur les écrits et le caractère de J.-J. Rousseau in Œuvres complètes de Madame de Staël*, 17 vols, 1820—1821. t.1, p.3. 以下、スタール夫人からの引用は同版による。
6. t.1, p.38.
7. enthousiasme は周知のようにのちの『ドイツ論』におけるキーワードである。語源的に transport divin の意味を持つこの語が、すでにここに芽ばえているのは興味深い。
8. t.1, p.3.
9. *Lettres sur Rousseau*. t.1, p.15.
10. ルソーのためによるずいぶん役をはたしたおしかけ用人, François Coindet (1734—1809) が当時はスタール夫人の父ネッケルの有力な秘書をつとめていた。コアンデは20年間近くルソーとつき合いがあったから(『告白』にも度々顔を出す), 若い彼女にルソーを親密に感じさせるさまざまな生きたエピソードを語ったことであろう。実際『ルソー書簡』にはコアンデからの情報をもとにした記述がある(例えば83ページ, 96ページ)。ルソー自殺説もコアンデからの情報がヒントになっている。
11. t.1, p.23.
12. Larg ; p.72.
13. t.1, p.3.
14. この句に対してはジョルジュ・ブーレのすぐれた分析がある。ブーレは、この行為を「生き急ぎ」la hâte de vivre と名づけ「持続は極めて独特の敵として立ちあらわれる。スタール夫人は未来を偶像化する(……)と同時に、これを嫌悪する(……), 他方、彼女はこの未来を廃し、急ぐということ、猛然と未来を破壊してしまい、そこに現在をおきかえようとする」Georges Poulet : *Espérance et souvenir dans l'expérience et la pensée de Mme de Staël*, in *Madame de Staël et l'Europe*, colloque de Coppet(1966), 1970, p.212.
15. t.1, p.4.
16. t.1, p.4.
17. t.1, p.5.
18. t.1, p.6.
19. シモーヌ・バレイエはスタール夫人の「旅」を不幸の象徴としてとらえ、soffrance に quitter, être quitté という定義を与えたが、これは私たちの論考における彼女のあらしめた「光」の喪失にもあてはまるのではないか。Simone Balayé : *Absence, exil, voyage*, in Colloque de Coppet(1966), 1970, pp.227-237.
20. Jean Starobinski : *Suicide et mélancolie chez Madame de Staël*, in Colloque de Coppet(1966), 1970, p.248.
21. t.1, p.5.
22. Starobinski ; p.251.
23. Poulet ; p.212, p.222.
24. t.1, p.38.

25. t.1, pp.96-97, p.101.
26. t.1, p.5.
27. G.Solovieff は上掲書で<第二序文>のほとんどの部分を La Femme (女性論)の項に分類して再録している。
28. *Correspondance générale de Madame de Staël*, 1962, t.I, p.6.
29. 例えば『情念論』での彼女の証言「もし全能の神が、人間をこの世に投げ込まれた際、人間に天界の生存方法をお教え下さっていたら[……]人間が相手の中で生きることや自己の存在を自分の愛する対象と合一することで自己を全うすることを許して下さったろう」t.3, p.118.
30. *De l'Allemagne*, t.11, p.527.
31. *De l'influence des passions*, t.3, p.135.
32. t.1, p.6.
33. “une tâche trop au-dessus de mes forces.” *Avertissement de l'Editeur*, t.1, p.ii.
34. Vinet ; p.30.
35. 「ジェルメースは愛の言葉を必要とする」、「愛のきびしい要求」、「一人ではすごしたくない人生」、「愛されることをやめようしない女」等々、いずれもコンスタンのスタール夫人に関する評言である。
Benjamin Constant : *Journaux intimes in Œuvres* (Pléiade), 1957, p.192, p.211, p.216.
36. t.1, p.10.
37. スタール夫人に「火」のイメージを持つのは私たちの幻想だろうか。例えば『ルソー書簡』で、彼女は chaleur を9回 ardeur(ardent)を5回, flamme(s'enflammer)を4回, brûler (brûlant)も4回, feu を3回, allumer を1回, その他 éclairer や briller 等, 光にかんする語も多用する、又(さまざまな語義はあるが) passion が45回も出てくる。
38. Vinet ; p.33.